

とろろ



2017年6月16日
NO.551



「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号 東海教区教務所内
TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097 info@tokai-hongwanji.net

伊賀組活動紹介

皆さんは伊賀組を御存知でしょうか。組内寺院11カ寺の教区内最小の組であります。さらに11カ寺中4カ寺が住職代務で、さらにさらに活動可能な住職は6名という何とも寂しい現状の組であります。それ故に他組のような十全な組活動や実践運動は望むべくもなく、現在では教化団体の一部は休眠中といった有様です。

それでも、前任組担当者の尽力による組連研復活と2期にわたる連研の継続が実現されました。これまでの連研は、毎回3班構成で話し合いを進めてきました。テーマに関連した世間話や雑談や悩み相談など、ご門徒と僧侶がひとつの輪になってお互いに気取らずに話し合う雰囲気大切にしてきました。最後には、全員でご本山へ参拝し、京都周辺の親鸞聖人ゆかりの地などを見学してきました。ご本山での法要によって定期的開催とはいきませんでした。しっかりと歩みを進めて来た組内一同自負しています。

この歩みを今期になって滞らせたり衰退させるわけにはいきません。そこで、本年度中に、第13期伊賀組連研開催に向けて準備中であり。これまでの積み重ねを大切に、今期の連研に臨みたいと思います。



(京都本願寺にて)

Contents

組活動紹介	P1
こころばなし(法話)	P2
声	P3
特集「金城六華園について」	P4
坊さんの書棚	P6

「口からこぼれるお念仏」

加藤秀人（海幡組願成寺）

「口からこぼれるお念仏」

自坊に帰ってきてあっという間に4年の月日が過ぎてしまいました。

あるお宅の月参りに伺った時の話ですが、そのお宅ではいつもおばあちゃんが月参りの間、後ろに座ってくださるのです。後ろに座っているおばあちゃんの口から沢山のお念仏が聞こえてまいりました。「おばあちゃんは本当に阿弥陀様のおこころを喜ばれているお同行なのだな」とそのお念仏の声を通して感じさせて頂きました。月参りのお勤めも終わり、振り返っておばあちゃんの話聞かせて頂いていました。

おばあちゃんは畑仕事もされるようで、よく草刈り鎌を持って畑に出掛けるそうです。草取りをしていると、知らず知らずに口からお念仏がこぼれてくるのだそうです。私は、「なんで畑仕事をしている時にお念仏がそんなに出るのですか」と伺いました。そうしたら、おばあちゃんがこう教えてくれました。

「私はこの年になって皆様のお役に立つようなことは出来ませんが、草取りをするくらいなら出来るのでやらせてもらっています。ですが、鎌で草を取っていると必ず土の中に鎌を入れるのです。土の中には、目には見えないけれど、多くの命が生活しております。その命を私が殺しているのではないかと思うと、お念仏をせずにはおれないのです。」と教えて下さいました。

おばあちゃんにお年を伺いましたら、もうすぐ96歳になるそうです。私も日頃、境内の草取りをしますが、土の中のいのちにまで目を向けたことは一度もありませんでした。



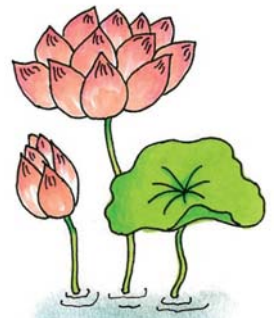
私自身も草取りをしている時に多くの命を奪いながら、そのことにも気付かずにいる事をおばあちゃんの話伺い気付かせて頂きました。

『歎異抄』の後序の中に、聖人（親鸞）のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と教えて下さっております。

阿弥陀様はご本願の中で『十方衆生』とお示し下さっておりますから、「全てのいのち」と見てしまいがちであります。親鸞聖人は「誰か他人ではなく私の為の救いでありました」とお喜びになりました。

「それほどの業」（おこない）をしているのに、していることさえ気付かずに罪を作り続けている私でありました。そのような我が身を阿弥陀様は、先手に見抜いて下さり、救いたいと願いを立て、願いが願い通りに成就して下さいました。おこころを私に届けて下さり、どうか受け取っておくれよとこの私に『お念仏』となつてはたらき続けて下さっていました。

おばあちゃんが称えているお念仏を通して我が身の罪深い事、その我が身を暖かく包み込んで下さるお念仏がこの私にも今届いていた事に気付かせて頂きました。



「あるCM」

声

読者の
ページ

紙おむつメーカーでもあるユニチャームのインターネット上の動画広告に批判の声があがりました。その動画は子育てに奮闘するお母さんの姿を描いたものでした。我が子の誕生を喜んだのもつかの間で、夜泣きで何度も起こされ、自分の食事は赤ちゃんを抱っこしたまま、疲れてぼんやりしていると赤ちゃんの泣き声でハッとす。自信をなくし疲れ切った顔のお母さん。ふとその時お母さんの人差し指を赤ちゃんが握る。お母さんの顔が明るくなっていき、最後に「その時間が、いつか宝物になる。」という言葉で締めくくられる。この動画に「育児で大変な時期を思い出してつらい」という声や、「母親一人での育児を容認している」との批判が向けられました。

批判の理由を考えると、母親一人に育児の負担が偏っていることに対する解決策が示されないまま、「宝物になる」と美化されたような作りが問題なのかもしれません。ただ、紙おむつメーカーが作ったことを考えれば、少しでも子育てする人を応援したいという思いがあったはず。思いを伝えることの難しさを考えさせられました。

私もただ今子育ての真っ最中。そんな中励まされたのは、「子育て大変」と友達にグチった時に言われた「お前にもそんな風に変な思いをしながら育ててくれた人がいるんだよな」の一言。そんな動画が見てみたいような、やっぱりそれも批判されそうなの…

「家事代行」

家族が手術することになりました。リハビリを含めて約一ヶ月の入院が必要とのこと。家事を一手に担っていた人が不在となり、その代行を仰せつかりました。

それまでは、お参りを中心としたお寺の業務に専念し家のことはほぼまかせっきりでしたので、どうなることやらとも思いましたが、学生時代の一人暮らしの経験もあり、事前に家事についてのレクチャーも受けたので、まあ大丈夫だろうと高を括っていました。

しかし家事代行を始めてみると、掃除・洗濯・炊事など一人暮らしの時とは規模・量ともに比べ物にならず、道具の使い方に戸惑ったり、必要なモノがどこに仕舞ってあるのか分からなかったりと悪戦苦闘の連続でした。水仕事で直ぐに手が荒れはじめ、一日の終わりにスキンケアクリームを塗ってから床に就く習慣が出来ました。あらためて日々の家事の大変さとそれを担ってくれていたことへの感謝の念を強くした次第です。

退院後、すぐに元通りとはいかないので家事代行を続行中。一ヶ月が経ち、それなりに上手くこなせる様になったつもりでしたが、それまで家事を担ってきた者の目からは不満足な出来らしく、ダメ出しをくることが多々あります。腹立たしく思いつつ、自分もそう思わせていたのかも反省させられる日々です。

「施設に暮らす子どもたち」

安藤昭丸(児童養護施設金城六華園施設長)

皆さんこんにちは。金城六華園施設長の安藤昭丸です。早いもので、着任から2年が経ち、あっという間の2年であったと感じています。今回、金城六華園、ひいては児童養護施設について、さらに多くの方に知っていただく機会を頂戴いたしましたので、現状を交えながらお話ししたいと思います。

さて、まずは金城六華園についてお話ししたいと思います。

この金城六華園が建つ「志段味(しだみ)」という場所は、名古屋市の北東の端に位置し、尾張地区最大規模の古墳群が存在し、現存する古墳群は国の史跡にも指定され、歴史を感じさせる地域であります。また周辺は東谷山・森林公園など、自然豊かな場所でもあります。

施設は、平成24年度に園舎の全面改築を行い、大舎制から少人数を生活基盤とするユニット制へ移行し、より家庭的な養育を目指し日々奮闘しています。

現在定員は45名、平成28年度末をもって高校卒業・就職した児童1人、高校入学に伴って家庭引取となった児童が3人で、現在は(平成29年4月現在)幼稚園児6人、小学生11人、中学生12人、高校生10人、計39人の子ども達が一つ屋根の下で生活しています。

【入所してくる子ども達】

では金城六華園をはじめ、これら児童養護施設に入所してくる子ども達は、どのような経路で入所してくるのかご存知でしょうか。

名古屋市には2つの児童相談所(中央・西部)が設置されており、その相談所に、子どものことで相談される件数は、年間で5,700件、特に虐待に関しては2,400件にもなっています。

(平成27年度実績より)

その虐待に関する相談経路は、警察からの通報によるものが大半を占め、相談件数の55%、近隣知人からの通報が11%、学校からの通報が10%となっています。

通報を受けた児童相談所は、子どもの安全を確認・確保するため、まず初期対応班が動き、必要に応じて子どもの保護を行います。

保護は、原則保護者の同意を得て行いますが、危険性・緊急性等、子どもの状況によっては「立入調査」や児童相談所長の「権限による一時保護」を行い、児童相談所内の「一時保護所」へ入所の手続きをとります。さらに長期に保護者との分離が必要な場合、受入可能な児童福祉施設へ打診し、受入可能となれば施設での一時保護委託や措置入所となります。

【子ども達が受けている虐待】

現在名古屋市には、民間児童養護施設が12施設と乳児院が3施設あり、これらの施設に生活している子ども達は、虐待やネグレクト(養育放棄)、家族・親子関係不調や保護者の生活困難などから保護され、措置されてきた子ども達が大半を占めます。

特に虐待を受けた子ども達のなかでも、実父・実母からの虐待から保護された子どもが最も多く、虐待種別をみると身体的虐待(子どもを傷つける暴力等)・性的虐待・ネグレクト等がありますが、心理的虐待(子どもへの暴言や無視、子どもの目の前での配偶者への暴力等)が虐待種別全体の55%を占める現状となっています。

これだけでは子ども達だけが被害者のようにとられるかもしれません。しかし実は親もまた被害を受けていたかもしれないのです。虐待をしている親も、その親から虐待を受けてきたという、虐待の連鎖がそこには存在する場合もあることを忘れてはなりません。また、この連鎖を作り出している社会に目を向ける必要もあるのではないのでしょうか。子育てにおいて、周囲の支援を得られず孤独にさいなまれ、結果として虐待が起こる。それを防ぐ為に、社会全体で子どもを守り育てる意識を持つ必要があると思います。

【これからの施設の役割】

措置が決定し、施設に入所してくる子ども達に、18歳まで生活支援・学習支援を行っていますが、生活面・学習面ともに、積み重ねが大事です。現在六華園では、小学生には家庭教師の学習指導、中学生には塾の助けを借りて取り組むなど、まずはそこを第一に養育に取り組んでいます。

第二は、その先のこと。措置解除後に向けての指導も重要な職務の一つです。

家庭復帰を希望しても、ままたらな子ども達がいるのも事実ですから、中学卒業・高校卒業しただけでは、施設を出て社会へ出て行く準備が出来ていないため、健全な生活が送れるとは到底考えられません。



それについては、昨年度より名古屋市の取り組みとして「自立支援担当職員」を配置して、進学・就職共に子ども達の将来に向けての対策がとられるようになりました。

施設においても一昨年度からは、卒業年度に施設内の居室を利用し、自立に向けてのシミュレーション、すなわち模擬的に一人暮らしを想定して自立訓練を行っています。炊事洗濯から金銭管理まで、必要最低限のことしか出来ませんが、自立に向けての一步を進めています。

施設の子ども達は、一般の家庭の子ども達のように、普段の生活を通して学べる様々な社会ルールや技術を身につけることが出来ないまま施設に入所してきます。児童養護施設の役割は、入所している子ども達が、生活・学習・自立に於いて、他の一般の子ども達と同じスタートラインに立つことができるよう支援することだと考えます。

そしてそのスタートラインをどこに持って行くかを話すとき、私は子ども達に、走り幅跳びを例に話すようにしています。

踏み切り場所を社会に出る地点と考え、教育期間を助走とします。義務教育の助走9mで跳ぶ距離、更に高校教育を加えて助走12mで跳ぶ距離、更には大学教育を加えて16mで跳ぶことの出来る距離の違いを話します。助走でより遠くへ跳ぶ知識と力を蓄え、大きく社会に飛ばたいと願うばかりです。

各方面からのご協力をいただきながら精一杯努めてまいります。ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

『みみをすます』

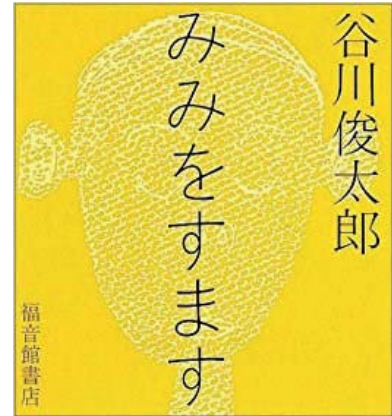
著者 谷川俊太郎
発行 福音館書店

絵・装本 柳生源一郎

とあるワークショップで順に朗読した際にとっても引きつけられた。今まで詩集など買ったことがなかったが、思いがけず買ってしまった。表題の『みみをすます』のほかにも5つの詩が収められている。一つ一つの言葉の響きの美しさということに気づかせてもらった。目で追うのも楽しいが、声に出して読むとさらに力をますように感じる。声を出しているのは私の口のはずなのに、詩の世界に引き込まれ、私の意志とは別のところから聞こえてくるようだった。

全ての詩がひらがなとカタカナで構成されているため、小学校2年生になる息子とかわるがわる音読している。彼はこの詩をどのように受け取っているのだろう。なかには「老い」や「死」を感じ、人間の力強さを想起させ、それをも超えるものを想像させるものもあった。少し聞いてみたいと思う。

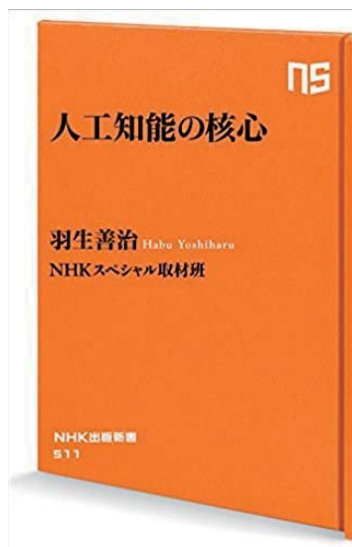
詩と詩のつなぎ目に柳生源一郎さんの人間の顔の絵がさしはさまれているが、それもまた力強い。またいつか手に取ったときにはきっとちがった受け取りをするのだろう。「詩を読むなんていつぶりだろう」という人にもおすすめの一冊です。



『人工知能の核心』

著者 羽生善治 NHKスペシャル取材班
発行 NHK出版新書

2016年5月に放送されたNHKスペシャル『天使か悪魔か 羽生善治 人工知能を探る』を新書化したもの。番組プロデューサーは言う。1996年にプロ棋士へのアンケート「コンピューターがプロ棋士を負かす日は？」が『将棋年鑑』に掲載された。多くの棋士がそんな日は来ないと真っ向から否定したが、その日をほぼ正確に予想していた棋士がいた。羽生善治は「2015年」と答えていたのだ。スタッフの「羽生さんは人工知能(AI)に勝てるのでしょうか」の問いかけへの答えは秀逸だ。「今、将棋のAIは、陸上競技で言えば、ウサイン・ボルトぐらいです。運が良ければ勝てるかもしれない。しかしあと数年すれば、F1カーのレベルに達するでしょう。そのとき、人間は互角に勝負しようとは考えなくなるはずですよ」と答える羽生さんはAIの進化が楽しみではないという気持ちに見えた。羽生さんはAIの進化を肌身で感じていて、人間の新たな可能性を切り拓くものと肯定的に考える人なのだ。



この本は棋士目線なので他のAIの本とは着眼点が違う。将棋の一手を打つ時の人とAIの思考の違いを掘り下げるくだりは興味深い。人の思考は美意識や恐怖心が密接に関係しているがAIにはそれがない。AIの思考にはブラックボックスがある。そんなAIが出した結論を人間はどう判断するのか。

とにかく羽生さんの知識の豊富さに驚いた。AIの知識本としても興味深く読める内容だ。最後の「人工知能について知ることは、人間について深く知ることかも知れない」という言葉が印象的である。